様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 １１ 日現在

機関番号：１１３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｋ００４６７

研究課題名（和文）19世紀フランスの絵物語における旅と交通手段の主題化の意義

研究課題名（英文）Travel and Transportation as Frequent Motifs of Nineteenth French Comics

研究代表者
森田　直子（MORITA, Naoko）

東北大学・情報科学研究科・准教授

研究者番号：４０２９５１１８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、19世紀フランスの物語漫画がなぜ旅・交通をテーマとして発達したかを多面的に考察した。まず、物語漫画の先駆者スイス人R.テプフェールが、単に旅をテーマとするだけでなく、移動のスピード感、追跡場面、夢の中の旅という入れ子構造など、多くの技法を生み出したことを示した。次に、その影響を受けたフランスの物語漫画について、馬車、蒸気船や列車などに乗る身体感覚を表現したカム、アルプス観光を諷刺したギュスターヴ・ドレ、第二帝政期フランスの交通を物語に取り込んだレオンス・プティの作品を調査した。滑稽な旅物語に工業化・都市化する社会への不安が描きこまれた結果、漫画独自の表現として結実したのを確認した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
フランスの出版界では、技術上の革新と読者層の拡大などにより、1830年代前後から総合情報誌や諷刺新聞、挿絵本など、絵入りの出版文化が花開いた。物語漫画は、社会諷刺と連載小説の中間領域として、愚かな面を持つ主人公を通じて社会を諷刺しつつ、絵と文の相互作用によって時間・空間の独特な表現を開発した。近代的な旅・移動という題材は、漫画というメディアの特徴とうまく合致していたと同時に、工業化、都市化する社会をうまく生きられない人々をアンチヒーローとすることで、スピードが加速する都市生活のトラブルやトラウマの貴重な証言となっている。

研究成果の概要（英文）：Our research aims to examine why French picture stories, later called “comic strips”, frequently adopted the themes of travel and transportation to evolve in nineteenth century. First, we investigated works of Rodolphe Topffer (1799-1846), today considered as the father of the comic strip, who not only told travel tales but also invented various expressions for describing speed, chase and dream travel. Next, we examined French caricaturists under his influence. Cham focused on the physical uneasiness of various transport facilities (omnibus, steamships, trains), whereas Gustave Dore; satirized Alps tourism. In the 1860s, Leonce Petit combined a Bildungsroman with transportations and urbanism during the Second Empire. We have noted these artists have inscribed vague anxiety about industrialized and urbanized society.

研究分野：比較文学、フランス文学、表象文化論

キーワード：19世紀フランス　絵物語　漫画　旅　交通機関

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

申請者はここ数年間、コミックスを物語メディア史のなかに位置づけるという視点から、ヨーロッパの初期コミックスの歴史的研究を行ってきた。とくに、スイスの R.テプフェール（1799-1846）の仕事の歴史的評価を行ってきたが、彼が得意とした荒唐無稽な旅のテーマが、ローレンス・スターン、グザヴィエ・ド・メーストルなど、文学史上の非正統的な（脱線ばかりの）旅文学と関連していること、それが絵物語の表現技法の可能性を広げたことに興味をもつようになった。また、彼の後に続くストーリー漫画の描き手たちである、カムやギュスターヴ・ドレ、レオンス・プティやクリストフも、旅や移動を内容上・表現上の重要なモチーフとしている。急激な工業化・都市化が進む時代背景のもとで、交通手段をモチーフとした笑いの文芸が生み出されたことには、ストーリー漫画というジャンルに固有の意義があったのではないかと考え、本研究の着想に至った。

もともと旅行記というジャンルは、特にロマン主義以降に関しては、一種の自分語り、自伝文学として捉えられることが多かった。しかし、サンシュが示したように(D. Sangsue, « Le récit de voyage humoristique, XVIIe-XIXe siècle. » *RHLF,* 2001)、知的探求や巡礼、保養などを目的としたオーソドックスな旅とは別に、「愉快な旅」ともいうべき、しばしば壮大な虚構の口実ともなるような文学上の旅の系譜が存在し、サンシュによればテプフェールはこの系譜の終わりに位置する。また、バンド・デシネの歴史の上での旅や冒険の重要性を指摘した研究者には、グルンステン、フィリオらがいる。ストーリー漫画に旅や冒険があふれていることは当然に思われるが（20 世紀以降では『タンタンの冒険』もその一つ）、さまに工業化や都市化の進む 19 世紀という時代に生まれた新メディアが、乗り物や移動のテーマをうまく活用したことは、語りや表現技法の点からきちんと考察するに値すると思われる。また、交通機関の発達が人々の感性に与えた影響について考える上で、W.シヴェルブシュの古典的著作『鉄道旅行の歴史』も参照している。

２．研究の目的

本研究は、絵物語／コミックスの物語技法を通時的に見直すという長期的展望のなかで、コミックスの草創期に意識されていたメディア的特性を具体的な作品分析、とりわけ旅と交通の表現の分析を通して解明することを目的とした。

また、図像を媒介とした社会諷刺と連載小説の中間的領域であった 19 世紀の絵物語を、新しい娯楽文化、笑いのメディアとして位置づけ、そのなかで文明批判、消費文化の諷刺、アンチヒーローの演出が行われたことを検証しようと試みた。

分析においては、物語論を絵物語に適用することを試みた。具体的には、①絵と文の組み合わせによる二つの語りの協奏とずれ、そして②絵を連続させる視覚的語りという２つの観点を用いた。旅の物語における、時間の進行の表現も重要な点である。初期絵物語において描かれる時間は、物語の発端から結末まで一直線的に流れる時間だけではない。「物語の現在」が進行していくのと並行して、反芻（回想）された時間の進行が表現されたり、別の場所での同時進行の出来事が語られたりする。その際の語りの技法に注目し、複数視点の並置によるアイロニー、自ら

の状況を客観的に知ることの不可能性、主体の不確かさ、夢と現実の境界の不分明性などを意識した。

19 世紀におけるカリカチュア（諷刺画・戯画）、挿絵本、絵物語、写真、実写映画、アニメーションなどの図像文化については従来、視覚文化史や美術史の観点から扱われることが多かった。カリカチュアを文学と関連づける際には、ベンヤミンが「パノラマ文学」と名付けた、社会諷刺を含んだスケッチ風の生理学ものに焦点が当てられるのが一般的で、カリカチュアと写真の橋渡しをしたナダールへの注目を除けば、図像文化の一つとして絵物語から映画への流れの中にカリカチュアを位置づける観点が希薄だった。本研究の独創的な点は、絵物語をカリカチュアの発展形としての物語メディアととらえ、その語りの技法の成立における小説や演劇との相互関係を重視することにある。「物語」という形式のメディア横断性について関心が高まっている今日、コミックスの「物語る能力」の由来と特性を明らかにすることには意義がある。

視覚的表現の変遷を都市化、産業技術との関連でとらえる点にも本研究の独自性がある。たとえば諷刺画家のドーミエは、くりかえし列車内の乗客を描き、都市生活風景のなかに位置づけた。交通手段の発達・変遷は、本研究において、単に物語のテーマとしてではなく、読者の期待や世界観を形作るものとして位置づけられる。

３．研究の方法

①絵物語発展の基盤としての諷刺新聞の役割の確認

テプフェールがジュネーヴにおいてやや孤立した形で試みた長篇絵物語のフォーマットを、より大規模に普及させ、定着させたパリの出版界の役割をあとづける。とりわけ『ラ・カリカチュール』『ル・シャリバリ』を創刊したシャルル・フィリポンが、『ジュルナル・プール・リール』、『ルヴュ・コミック』といった、笑いと図像を主軸とする諷刺新聞・雑誌を発行し続けることで、フランスにカリカチュアと絵物語の継続的な発表の場を提供したことに着目する。

②観光旅行とツーリスト批判

初期絵物語には、スイスを中心とした観光旅行が多く描かれた。初の女性登山家によるモンブラン登頂、1821 年の地理学会の設立などの文化的背景を確認しながら、絵物語におけるツーリスト批判や登山家表象を、表現技法に注目しつつ考察する。

③日常的交通機関の快と不快、トラウマ

人々が日常生活で利用する公共交通機関（乗合馬車、郵便馬車、鉄道など）は、まだまだ快適さの点で不十分な点が多く、旅・移動の不便や不快がつきものであり、大きな事故もあることからトラウマとも結びついていた。そうした交通機関の経験や身体感覚が、絵物語においてどのような表現と結びついたかを確認する。

④アンチヒーローの演出

笑いのメディアとしての絵物語に不可欠なのは、愚かでありながら憎めない主人公表象である。主人公はしばしば視野や考え方が狭く、それを俯瞰する視点から語る語り手が別に存在したり、絵が彼を客観的に描いたりすることで、アイロニーや笑いが演出される。こうした点に留意して、初期絵物語における主人公造形について考察する。

４．研究成果

2018 年度には、1840-50 年代のフランスで絵物語のジャンルが展開するきっかけを作ったテプフェールにおける旅のテーマを考察した。テプフェールの絵物語七作のうち、『フェステュス博士』と『クリプトガム氏』においては、旅が物語の基本構造となっており、その他の作品でも、乗り物を使った移動が効果的に用いられる。テプフェールにおいては、旅が単に主題を提供するにとどまらず、先を急ぐスピード感や、追跡劇、夢の中の旅という入れ子構造の演出など、多くの表現技法を生み出すきっかけとなっていることを示した。また、テプフェールが絵物語と並行して制作した挿絵入り旅行記において、旅と交通手段というテーマが、徒歩旅行の美学との関連でどのように取り上げられているのかを明らかにした。

2019 年度には、ヨーロッパにおける観光文化の展開を背景とした、テプフェールの創作活動における徒歩旅行、交通機関のテーマの位置づけ（観光旅行とツーリスト批判の言説、交通機関の経験や身体感覚の表現）、漫画と実録旅行記との相関関係、またテプフェール以後のフランス諷刺新聞における絵物語フォーマットの探求を担ったカム、ギュスターヴ・ドレ、レオンス・プティらの絵物語の中の旅・交通のテーマと表現手法について、研究発表や論文投稿を行った。

2020 年度には、19 世紀フランスの絵物語における旅・交通のテーマに関する暫定的なまとめとして、レオンス・プティ『ベトンさんの災難』（1868）の解読と翻訳を行った。プティは、画風・主題・表現技法からギャグのレベルまで、スイスのロドルフ・テプフェールから影響を強く受けた画家・挿絵画家として知られる。徒歩、馬、駕篭、馬車、船などによる旅を物語構造に生かしたテプフェールに対し、プティはオスマンによる都市整備事業や万博を背景としたフランス第二帝政期の鉄道や乗合馬車、下水道網を冒険物語に組み込み、急速な都市化への不安をにじませた教養小説風絵物語に仕立てた。また『ベトンさんの災難』にアルジェリア兵が登場する点もテプフェールの絵物語と共通するが、第二帝政期フランス社会におけるアルジェリア人の位置づけは、1830 年代とは大きく変化している。帝国主義と絵物語との関係については、今後継続して取り組むべき課題として位置付けている。

今後は、19 世紀末に読者層が子どもに移っていく過程で旅や交通のテーマの扱いがどう変化したか、アンチヒーローの演出と実在モデルのキャラクター化などの主題についても考察を進めていく。また、戦争や植民地の表象と旅のテーマとの関係の重要性について研究者から指摘を受けたため、帝国主義と絵物語との関係については、今後継続して取り組むべき課題として位置付けている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 森田直子	４．巻 141
２．論文標題 長篇漫画の草創期におけるギュスターヴ・ドレ	５．発行年 2020年
３．雑誌名 文芸研究	６．最初と最後の頁 （左開き）105-117
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　4件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 森田直子
２．発表標題 新刊著書『「ストーリー漫画の父」テプフェール――笑いと物語を運ぶメディアの原点』（萌書房、2019）をめぐって
３．学会等名 日本マンガ学会海外マンガ交流部会第12回公開研究会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Naoko Morita
２．発表標題 Rodolphe Topffer, premier auteur de la bande dessinee : les traits faciaux, les gestes et l’histoire
３．学会等名 Ecriture-Image en Coree, au Japon et en Europe（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 森田直子
２．発表標題 ロドルフ・テプフェールにとってのジュネーヴ、スイス、パリ
３．学会等名 國學院大學文学部共同研究 「スイスの多言語状況とその文化面における影響」第１回公開研究会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 森田直子
２．発表標題 コマ割漫画の始まりと旅の文化
３．学会等名 学習院大学人文科学研究科身体表象文化学専攻主催講演（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Naoko Morita
２．発表標題 Rodolphe Topffer, defenseur du voyage a pied
３．学会等名 Les ecrivains-marcheurs du romantisme au XXIe siecle（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 森田直子
２．発表標題 ロドルフ・テプフェールの徒歩旅行
３．学会等名 ASLE-Japan／文学・環境学会全国大会
４．発表年 2018年

〔図書〕　計1件

１．著者名 森田直子	４．発行年 2019年
２．出版社 萌書房	５．総ページ数 374
３．書名 「ストーリー漫画の父」テプフェール	

〔産業財産権〕

〔その他〕

レオンス・プティ『ベトンさんの災難』、まえがき・日本語訳　森田直子、ナラティヴ・メディア研究会、2021年。

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関